明日香川での潔身

君により　言の繁きを　古郷の　明日香の川に　潔身しに行く
（巻四―六二六）

万葉文化館の近くには、今も飛鳥川（明日香川）が流れています。普段はわずかな水量の川ですが、雨上がりなどには上流からの雨水を集めて、驚くほど激しい流れに変貌します。

そんな明日香川の東岸に、何代にも亘り天皇宮が営まれていたことは周知のとおりです。当地は「伝飛鳥板蓋宮跡」と称されていましたが、このたび「飛鳥宮跡」と総称されることになったそうです。奈良時代に詠まれた明日香の歌には多かれ少なかれ飛鳥諸宮への憧憬がうかがわれますが、この歌ではそれが希薄だとも指摘されています。

題詞には「八代女王の天皇に献れる歌」とあります。八代女王（矢代王とも）は、聖武天皇（在位七二四～七四九年）に寵愛を受けた女性でした。『続日本紀』には、天平九年（七三七）に无位から正五位に叙されたこと、天平宝字二年（七五八）に「先帝」に寵愛を受けながら「志を改むることを以ちて」従四位下の位記を破棄されたこと、が記録されています。この年に淳仁天皇が即位していますので、「先帝」とは女性である孝謙天皇のはずですが、ここは聖武天皇のこととみられています。聖武天皇に寵愛を受けていたのにも関わらず、天皇亡き後に心変わりした、ということで罰せられたものと考えられています。

明日香川の流れ

この歌は、あなたのせいで噂が激しいので故郷の明日香川にみそぎをしに行きます、という内容です。「みそぎ」とは、身についた穢れを水の霊力で除去しようとして行う呪術行為をいい、黄泉の国から戻ったイザナキが日向の橘の小門の阿波岐原で行ったと『古事記』に描かれていることでも知られています。そんな潔身が必要なほどの激しい噂にさらされたのも、後に位記を破棄されたのも、聖武天皇の寵愛を一身に受けていたことに対する周囲からの嫉妬に拠るものと理解されています。

まるで天皇に対する恨み言のような歌ですが、地名を明日香川ではなく大阪湾に入れ替えた歌も伝わり、恋の歌の常套表現だったとみられます。

（万葉文化館指導研究員・井上さやか）